

今日の福音書には、「金持ちの男」という見出しがついています。同じようなお話がルカでは「金持ちの議員」となっていますが、私たちに一番なじみ深いのはマタイ19章に出て来る「金持ちの青年」でしょう。もっと以前は「富める青年」の話として、イエス様をめぐる絵の中でもよく登場してきます。

この有名なお話の中に、大切な教えがあると思いますが、皆さんはどこが大切な教えだと思いますか？  
『10:21 イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」 10:22 その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。』

最初は、この金持ちの方から、「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」と積極的に尋ねてきたのですが、自分の持ち物を売り払って、貧しい人々に施すということ。つまり、大きな犠牲を払うことが要求されているのですが、往々にして、金持ちにはそれができないことが語られています。持っている物を手放して、他人に施すことの困難さが問題なのでしょう。

このあと、イエス様は「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」と言われたので、弟子たちは困惑してしまいます。らくだが針の穴なんか、通れないからです。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」とされています。

しかし、ここで説明が必要です。

イエス様は全く不可能なことを言い、神にならできる、と言われたのではありません。今イエス様はエリコの城門の近くにおられるのです。その城門には扉がありますが、日没と共に閉ざされます。そして、夜間には必要に応じて小さな門が開閉されます。その門は、荷物を運ぶらくだが一頭だけ通れる大きさです。夜盗、つまり夜に現れて物を盗む泥棒を警戒しての対策です。

イエス様の話を直接聞いた人々は、イエス様の視線を見て、その針の穴とは、小さな門のことであると分かったのです。だから、「金持ちが救われるよりは、らくだが針の穴を通るほうがやさしい」の譬え話は、「イエスが全く不可能な話をしているのではない」とわかるのです。狭い門から入りなさいということなんだろうと思います。困難なことにも取り組む弟子を期待しておられるのでしょう。

そこで、この、自分の持ち物を売り払って、神の国に入るということ。別の言い方をすれば、この世ではなく、天に宝を積むためには、どうすればよいのか、が問題になります。

以前、「バベットの晩餐会」という映画を上映したことがあります。デンマークの小さな町に、ルーテル教会がありました。その教会の牧師には二人の美しい娘がいましたが、やがて牧師は亡くなり、娘たちは結婚することもなく、その教会の礼拝を守っていたのです。

そして亡くなった牧師の記念会をしようということになりますが、その晩餐会で、亡くなった牧師さんをしのんで、みんなが思い出話をする場面がありました。

私の心に残っている言葉は、印象的だったので、教区報の荒野の声にも書いたことがあります。それは牧師が語ったと言われる言葉。『あの世へ持っていけるのは、人に与えたものだけだ。』というものです。

どうでしょうか。普通は、自分の持ち物を与えた場合、自分が貧しくなると考えます。お金持ちというのは、与えないから、自分の所にお金が溜まるのだらうと思うのですが、そのようなこの世の富は、あの世へは持ってゆけません。

逆に、自分の持ち物を与えたなら、それは自分の持っている物を売り払い、貧しい人に施すようなものです。そうすると、天に宝を積むことになるのではないか。それは、言い方を変えたら、『あの世へ持っていけるのは、人に与えたものだけだ。』ということになるという理屈です。

数年前、「下流老人」ということが話題になったことがあります。年取ってから、経済的に困る人々が多くなってきている、そんな人たちを下流老人と言うのですが、そのような人々に、「自分の持ち物を売り払って、貧しい人に施しなさい。」と言ったら、途端に老後破産ということになるように思えます。自分の身を削って身軽になり、天に昇るということはなかなか考えにくいことです。

しかし、それじゃ、今日の聖句は無視するしかないのでしょうか。

私が以前「バベットの晩餐会」の牧師の言葉を引用した荒野の声に、関連して書いたのは、『「感動する本やおいしい食べ物に出会ったら、ひとりだけのものとせず、たくさん買って人々に配りなさい。そうすれば、天国に近づくことができる。」自分の財布が軽くなり、私も周りの人々も幸せを味わえる。それを実践する者でありたい。』というものでした。

はたして、貧しい生活をしながら、それができるだろうか。

ところが、聖書には、貧しい人たちが率先して自発的な施しをしていることが述べられている箇所があります。

コリントの信徒への手紙二 8章1節からです。

『◆自発的な施し

8:1 兄弟たち、マケドニア州の諸教会に与えられた神の恵みについて知らせましょう。

8:2 彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなったということです。

8:3 わたしは証しますが、彼らは力に応じて、また力以上に、自分から進んで、

8:4 聖なる者たちを助けるための慈善の業と奉仕に参加させてほしいと、しきりにわたしたちに願い出たのでした。』

マケドニアの教会の人々がそのような自発的な施しをするようになったのは、その貧しさが、「人に惜しまず施す豊かさになった。」とパウロは表現しています。

このようなことが、私たちには理解できるでしょうか。

思い当たるのは、先週の使徒書の終わりのところです。

ヘブライ人への手紙の2章18節です。

『事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。』

他の例としては、2週前に話した、善いサマリア人の話です。このサマリア人が道で倒れている人を助けることができたのは、自分自身が日ごろ、ユダヤ人の社会の中にあって、いろんな差別や偏見で傷ついていたので、他の傷ついている人をほっておけなかった、ということです。

しかし、このような優しさとか、愛情というのは、ある程度までの許容範囲に収まっている時ではないか、と私は最近思うようになりました。せっかく人を助けようとする気持ちがあっても、その熱心さのために、自分自身の生活が押しつぶされてしまう、という危険はないだろうか、と思うのです。

貧しさ、苦しさが度を超すと、善悪の判断能力がなくなることもあるのではないか、という極端な例も見ることがあります。「貧しい人は幸いだ」と簡単に言うわけにもいかないように思います。

そのような人間の弱さを知っているユダヤの賢人は、旧約聖書の箴言の中に、次のような言葉を残しています。

箴言

『30:7 二つのことをあなたに願います。わたしが死ぬまで、それを拒まないでください。

30:8 むなしなもの、偽りの言葉を／わたしから遠ざけてください。貧しくもせず、金持ちにもせず／わたしのために定められたパンで／わたしを養ってください。

30:9 飽き足りれば、裏切り／主など何者か、と言うおそれがあります。貧しければ、盗みを働き／わたしの神の御名を汚しかねません。』

お金持ちになれば、天国や神様のことを忘れてしまう危険がある。また、貧しさが、人助けではなく、盗むという罪を犯す危険もある、というわけです。

そのような極端な結果になることなく、適度な貧しさが人助けになるように願いたいものです。

他の人にプレゼントするほどの金はなくても、せめて自分の物を貸したり、自分の体験を分かち合える心の広さを持っていたいと思います。そんな生活を続けている時、私たちの優しさの度合いも、少しずつ、成長するのではないか、と思います。